

昭和六十三年十二月十一日 和敬塾予餞会記念講演

## 「世界の中の日本」

東京大学教授 木村尚三郎先生

はじめに

只今、御紹介頂きました、木村尚三郎でございます。この塾ができましたから三十三年経つということでございます、本日は卒業生を送る会だというふうに承りました。心からお慶びを申し上げます。またそういう席にお招き頂きました、たいへん嬉しく存じます。今日これからお話をさせていただくことは、今がどういう時代なのか、またどういう人間がこれから求められていると言ったらいいだろうか、それについての私なりの考えをお話させて頂きたいと思っております。

### 1 大陸主義の進展

#### ① ECの経済統合

いま、国際的にも国内的にも、常識が大きく変わろうとしているときであります。例えば、フランスとドイツという国は、過去一〇〇〇年間喧嘩をし、戦い合ってきたわけですが、現在はいちばん仲のいい国になりました。欧州共同

体の中でもいちばん仲のいい国になって、軍事演習まで共同でやっているのが現実であります。一九九二年にはEC十二カ国の市場統合が行われるというわけでございます。そうすると、三億二千万の新しい大きな大陸型の国家が登場してくるということでもあります。つまり、今まで国民国家というものが私たちが生きる上での大きな単位であったわけで、それがなくなるわけではありませんが、フランスもドイツもイギリスも、ちゃんと国はあり、軍隊はあり、国語はあるわけですけれども、にもかかわらず、ヨーロッパという大きな枠組みの中で自分たちの国を生かしているということでありまして、経済的に大陸型の複合国家ができてくるというわけがあります。これは大きな常識の転換でございます。

#### ② 米加自由貿易協定

アメリカも、御承知のように来年から、アメリカ合衆国とカナダとのあいだに自由貿易協定が発効する。現在既に、アメリカとカナダは

一体化が進んでいるのでありまして、国際電話をかけるのとわかることですが、要するにそれぞれの国ごとにコードナンバーがあるわけでありまして、日本のコードナンバーは八一番ですが、アメリカは一番です。カナダも一番です。共にいま、二つの国が一つのコードナンバーを使っているわけでありまして、もう既に事実上の一体化が進んでいるというわけでありまして、来年からいよいよ自由貿易協定が発効するということです。

つまり、自然地理と政治や経済の単位が、だんだんと共通になろうとしているという状況があります。ヨーロッパも、イギリスも含めまして、西ヨーロッパの自然地理と経済・政治の単位が一つになろうとしている。こういう状況であります。これが現在なのでありまして、つまり先進諸国はどこでもいま、大陸主義の進展というのが中心になろうとしているのであります。

#### ③ 日本の場合

その意味では先進諸国の中では日本だけが、国民国家をやっているわけであります。つまり日本だけで、ともかくも、これからあとも、国家の政治でも経済でもやっつけていこうということとでありまして、大陸型に広げようにもちよつと今すぐには難しい点がある。中国であれ、東南アジア諸地域であれ、あるいはソ連であれアメリカであれカナダであれ、環太平洋圏にはやはり手と手を取り合わなければならぬいたくさんの国がありますけれども、しかしそういった国を結んでE.C.のようなものを今すぐ作る事ができるかといえますと、これはやはり客観的に非常に難しい。経済体制が違うし、経済発展の度合も違うし、もちろん社会体制が違うということがあります。宗教が違う、文化が違う、いろんな違いがあります、たとえばE.C.のように同じキリスト教文化圏ということもできないわけです。だからすぐに環太平洋圏の中に、アメリカとかヨーロッパみたいな大きな国家群に片付けられるかという、そうはいかないわけで、日本は日本で国民国家をやらざるを得ない面がございます。しかし世界の体制からいうと、これはもう時代錯誤なのであります。つまりこれはちよつと遅れた行き方でありまして、今の発展途上国がやっているとおなじやり方を日本もやらざるを得ない。発展途上国の場合には、国家とか民族を単位にこれから経

済や政治を大いに固めていこうということが支配的なわけですが、日本はそういった意味では、国力・経済力としては先進国並なわけですが、国家のあり方としては発展途上国並と、こういう中間的なやり方をやっつけていかざるを得ない面がございます。どのぐらいやらざるを得ないか、それはわかりません。しかし、少なくとも三〇年ぐらいはやっぱり今のような形をとっつけていかざるを得ないんじゃないかと、なんとなくの感じがあるわけでございます。つまり日本と日本以外の国とを点と線で結ぶということをしざるを得ない。面の拡大、ヨーロッパとかアメリカがやっておりますような、面を拡大して自分たちを生かしていく——フランスもドイツも、E.C.の統合という面の拡大の中で自分たちを生かしていく——そういう事が日本の場合できないわけであります。

## 2 点と線の国際関係

### ① イギリスの変遷

点と線の関係というのは、まん中にある日本なら日本という国が元気のいい時代はこれは結構なものです、元気がなくなりましてとブツブツと切れてしまいます。ここが問題なのであります、面の拡大というのは、例えばその中にあるフランスとかドイツとかどこかの国がちよつとしよんぼりしましても、しかし相依り

相助けてなんとか勢いを辛うじてでも保つていくことができる。点と線の場合は、中心が活力がなくなりまして全部関係が切れていってしまう、こういった難点がござります。

かつてのイギリスがそうだったのであります、十九世紀は点と線の関係で大英帝国を作った。あのときはイギリスが、世界に先駆けて産業革命をやり、世界一の経済力と軍事力とを持っていたわけでありまして、他の国はかないようがなかった。したがって、点と線の関係でまさに世界に君臨できたわけであります。ところが十九世紀末、二〇世紀初めからだんだんと大陸ヨーロッパ諸国も力をつけてくる。そして第二次世界大戦の過程におきまして事実上西ヨーロッパ内部のまとまりがだんだんできてくる。戦後それがE.C.、E.E.C.の形成となつてあらわになつてくる。つまり、ヨーロッパ大陸諸国が力をつけてくる。しかも同時に手と手を結び始めてくる。となりまして、イギリスの立場は弱くなる。今までみたいに絶対的な技術力とか経済力の優位性を保てない。したがってイギリスも大陸の中に入り込んでくることになるわけでありまして、つまりイギリスにとつてはアメリカがいちばん仲のいい国です、また英連邦の関係もありますけれども、そういった関係を犠牲にしてまでも西ヨーロッパの中に入り込まざるを得ない。このような現在の状況

でありまして、自分たちイギリス人は、大陸の人間とは違うのだということで、今までイギリス人は「ブリテイッシュ」と言って大陸の人間と区別していたわけです。「ユーロピアンズ」というのはヨーロッパ大陸の人間のことで、イギリス人がユーロピアンズというときはフランスとかドイツとかイタリアとかスペインとかこういった国々のことであり、自分たちとは絶対ユーロピアンズとは言わなかったわけです。自分たちはヨーロッパ人ではない、イギリス人である、ブリテイッシュと言って区別してきた。それは僕らが、我々はアジア人ではない、日本人だといって区別するのと同じであります。そうやって区別してきたのが、いまサッチャーさんは、「We Europeans」と言わざるを得ない。「我々、ヨーロッパ人」と言わざるを得ないわけです。つまりイギリスをヨーロッパ大陸の半島としなきゃいけないような事情がいまある。イギリスの国力が衰えたということでもあります。したがって大陸との結び合いの中でしか生きられない。こういう事でございます。

### ② フランスの台頭

しかし、もし一九九二年にECの経済統合が実現すると、確実にこれからの中心はフランスです。フランスが情報センターになる。フランスに日本のヨーロッパ支社も本部を置き

ませんと、ユーラシアの情報が取れない。ソ連をはじめユーラシア全体の情報がとれないということ、いまヨーロッパのセンターがロンドンからパリへと続々と移動を始めています。ロンドンに置いていたんじゃない、ヨーロッパの片田舎になってしまおうと、こういった恐れが企業家誰にもあるというのが現在であります。つまり金融センター・ロンドンから情報センター・パリへと、中心がいま動きつつあるとございます。そうなりますと、フランスは益々威張る、イギリスは益々苦しくなるということで、したがってサッチャーさんは、フランスは威張るなどいうのでしきりに牽制球を投げている。しかしその一方で、「我々ヨーロッパ人は」という言い方もしなければいけないのが現実であります。ということで、点と線の関係というものが、結局面による関係によって破られていくのが現代であります。

### ③ 古代ローマの繁栄と滅亡

かつての古代ローマの場合は、ローマ市はものすごく文明の程度が高かった。食い物である住居であれ、大きな都市づくりであれ、圧倒的な技術力・経済力があつたわけでありまして。周りの都市は、みんなローマに従わなければいけない状況があつた。ローマ市とそれ以外の五六二七の都市が、お互いに点と線の関係を結んだ。これがローマ帝国の実態であります。ローマ帝

国というのは、別に領域性があつたわけじゃなくて、ローマ市と周辺都市が五六二七本の点と線によって結ばれていた。これがローマ帝国の実態であります。つまりローマは圧倒的に技術力とか経済力、文明の程度に於て優位に立っていたからでありまして、みんなローマ人になりたかつた。はつきり言つてそういう気持ちがあつたわけでありまして。

ところが、それによつてだんだん周辺が経済力も文明の程度も高くなつてくる。そうすると、なにもローマにいちいち税金を納めて、穀物を納めて、少し程度の悪いローマ市民権をもらう必要は別にはないではないかという事になつて参ります。そうすると、ローマ市と周辺との関係が切れてくるわけでありまして。一方ローマ市の方は紀元三世紀頃になりますと、周りからいろいろと税金が入ってくるせいであります。働かないで暮らすのがいちばんいいということになつてくるわけでありまして。パンをもらい、サーカスを見て一年の大半を過ごす。だいたい三世紀ぐらいになりますと、一年の半分ぐらいが公の休みになつてくるわけでありまして。一年の半分が休みで半分は多少働く、これが古代ローマ市民で、自分の、ローマ自体の活力が段々衰えてくる。そうなりますと、今度は周りが、いま申しましたように経済活力がついておりますので、ローマ市なんかにはいちいち税金を



納める必要はないじゃないか、と関係を断つていくわけでありませう。断たれてもローマ市は文句がいえない。こういう状況になって参ります。これが古代ローマの滅亡でありまして、中心の活力がなくなりますと点と線の関係は非常に脆いということの一例であります。イギリスの場合は、ヨーロッパ大陸という大きなところが力をつけてきましたから、自分がその半島になるということできさらに命を延ばすことができる。古代ローマの場合はそういったものではなくて、要するに周りが新興国で、今のアジアのNIE Sみたいなものでありまして、新興国がどんどん興ってきたわけですね。自分が身を寄せる場所がなかった。したがって古代ローマそれ自体は四六七年という、——どうでもいい年ですが、つまり形式としてですが——、その年に滅びてしまうわけでございます。もう事実上、三世紀ぐらいから滅んでいたと言えなくはないわけでありませう。

というところで日本は、どつちに転ぶかは別として、その点と線の関係をやっぱりやっていかなくてはならないということでありませう。つまり、九〇年代から後の日本は、その意味では多難です。大きな大陸型の経済単位が二つもできてくるわけですから、その中で点と線の関係を我々はやっていかなきゃならん、これは非常に多難であります。これは覚悟する必要があります。

ります。つまり、今のような平和な、しかも繁栄した状況がそのままずっと続くというのではなくて、いま世界史の上では大きな転換が起こっているわけでありませう。では、なんでアメリカとヨーロッパは面の拡大ということを今やりつつあるのか。なんでなのかといいますが、それだけ国力が衰えた。一つ一つの国力が衰えつつある。ですから大同団結せざるを得ない。まあ日本はまだ、大同団結するという必然性はなかなか実感しないほど、まだ活力があるという事でもございませう。

### 3 技術文明の成熟

#### ① オイルショック

何故国力が衰えたのか、ということになりませうと、実はここには、日本を含めまして今、世界的に技術文明の成熟と、このような状況がございませう。これから日本は免れることはできないわけでありませう。一九七三年、オイルショックがありました。あれからあと世界的に景気の後退がきました。どうしてなのか、オイルダラー価格が上がったからか？ それだけでは決していないわけでありませう。オイルダラー価格の問題なんてのは今、大した問題ではなくなってきた、あれからあと先進諸国は必死になつてきて、あれからあと先進諸国は必死になつてきて、省エネルギー技術の開発をやりませうと、全体にオイルを効果的に使うという体制が整つて

きたわけでありませう、日本の場合はその点いちばん速く対応が進んだと言えるわけでありませう。オイルが問題なのではなくて、あのオイルショックでいちばん私たちに問題があったのは、つまりこれから石油の供給が危なくなる、では他のエネルギーを探そうと、こういう事になった。他のエネルギーを探してみても、結局のところ石油より優れたエネルギーは一つもないということに改めて気が付いたのが、オイルショックの最大の効果でありませう。

原子力があるではないか。——しかしながら原子力は、まだオイルに替わるエネルギーでは有り得ない。なんでかというところ、今まで例えば石炭エネルギーが出てきた。それによって私たちは蒸気機関車を走らせたり紡績工場を動かしたりしたわけでありませう。明らかに石炭によって新しい技術文明が興つたわけでありませう。石炭文明というものが、もう十八世紀の後半からあつたわけでありませう、ロンドン市が真っ黒になろうと、あるいは運輸士や機関士が真っ黒になろうと、実際に機関車が動くんですから、これは嬉しかった。多少の犠牲はあつてもそれによって文明が大きく開けたわけですから、人々は嬉しくつて、新しい技術文明に突入していったわけでありませう。つまり、ラッダイト運動みたいな機械破壊運動はあつたけれども、これは大きな力にならなかつたわけでありませう。

## ② 石油文明・電気文明

十九世紀末からは、今度は石油という新しいエネルギーが登場して参ります。電気・電力といったものも登場してきたわけでありませう。お蔭さまで、蒸気機関車が自動車に替わる。今世紀初め、一九〇三年からは、飛行機が飛んだ。そういう様に新しい事態が生じた。石油文明というものがそこで興って、今日まで至っているわけでありませう。電気もそうである、触ればビリツとしびれて、ときには死ぬわけでありまして、あれはある意味では危険なエネルギーですけども、しかし一八八九年、パリのムーラン・ルージュがオープンいたしました。

一八八九年という年は、ムーラン・ルージュがオープンするより以上に、実はパリに万博がありまして、エッフェル塔が建ったときであります。エッフェル塔は七〇〇トンの鉄を使って建てられたものでありまして、鉄文明のはじまりを象徴したわけでありませう。同時にいま申しました一八八九年には、パリにムーラン・ルージュがオープンいたしました、その模様は翌年一九〇〇年にロートレックが描いているわけでありませう。このとき普通は、フロアで踊っている男女の姿ばかりに我々は目がいきますが、天井を見ていただきたいわけですね。天井にたくさん電気がついているわけでありまして、つまり電気がムーラン・ルージュで輝い

た。それによりまして、みんな嬉しくなったわけでありまして、夜は真つ暗だと思っていたのが、フロアに影のない状態が初めて出てきた。嬉しくって嬉しくって、パリじゅうの紳士淑女が集まってきたわけでありませう。夜の暗さから解放されて、それでデイナーを夜とすることができるようになる。これは電気とともにであって、今までは一日一回の主な食事は昼間だった。夜になりますと、夜といえますか夕方まだお陽様のあるうちに、夕食を、ちよつと簡単にスープなどをすすって、それで寝てしまふというのが今までの生活だったのが、夜が開かれたわけでありませう。

つまり、石油文明・電気文明というのが十九世紀の末から興ったわけでありませう。まさに、あのエネルギーが新しい文明を開いた。では、これから石油がなくなる、有限であるというので、慌てて別のエネルギー、太陽熱エネルギーとか原子力とか、いろんなエネルギーが考えられるようになった。では原子力は、新しい文明を生むか？ 原子力時代になったら何が起るんだらうか？ 月まで三段飛びで行けるとか、空を歩けるとか、何か新しい技術文明が興るかといえますと、今のところ残念ながら、そういう明るい予想はない。つまり原子力は明らかに、代替エネルギーでありまして、石油がなくなるから、もったいないから、原子

力で代替しようということでありまして、別に原子力の時代になって新しい原子力文明というのがあるという可能性は、今のところない。いずれ興るかも知れませう。つまり、いま技術文明の大きな成熟期にきているということですね。石油文明・石炭文明はあつたけれども、しかし原子力文明というのは、今は考えられてないわけでありませう。原子力だけの問題ではありません。いま、鉄であれ石油であれ電力であれ、重厚長大の技術がすべて成熟しております。新しい大きな展開がない。

## ③ 新技術の登場

昭和三〇年代、四〇年代は、次々と新しい技術が私たちの前に登場して参りました。マイカーを買う。おかげで、我々の行動と思考の半径が急速に広がったわけでありませう。新幹線、ジェット機……、みんなそうでありまして、今まで経験したことのない速さで世界中どこでも行けるというわけでありませう。今までヨーロッパに行くのに四〇日以上かかっていたのが、一日で行けるようになった。世界中どこでも一日や二日で行けるようになったわけでありませう。ジェット機とかマイカーとか、あるいは新幹線とか、そういったことによりまして、人類が今まで経験したことのない思考と行動の半径を私たちは得たわけでありませう。

④ペニシリンの発明

そして同時に、ペニシリンが登場しまして、お蔭さまで私たちは——今までは肺結核で死ぬ人なんて非常に多かったので、私はまあ五十八ですが、僕らの世代で親兄弟親類縁者を肺結核とか肺炎で亡くすなんていう話は、全然珍しくなかった。当り前のような話でございました。ところが今、肺結核も肺炎も、疫痢も赤痢も、病気がないわけではありませんけれども、私たちにとって怖い病気ではなくなりました。これはみんな、抗生物質のおかげであります。つまり、大きな健康の増進が、技術によつて展開されたわけであります。

私たちにとつて、肺結核は怖い病気ではなくなりましたが、代わりに怖い病気になったのが、癌であります。癌はいまだに、原因すらわからない。一時期、お医者さまが図に乗りまして、「いや、もう癌なんて刻一刻と追いつめられております。二十一世紀の初めになれば必ず克服されます」と、こうおっしゃつておられました。が、この十年間に癌で死ぬ人の総数は変わっていないどころか、少しずつ増えている気味すらある。肺結核は少なくなりましたが、肺癌は増えている。癌については、原因すらもわかっていないわけでありまして。「いや、もう高齢化が進んでいるのだから、人間何かで死ななきやいかんのだから、だから癌が増えているのです」、

なんてお医者様はおっしゃいますが、それはそうで、なんかで死ぬのは当り前なのですけれども、しかしそれだからといって、何で癌になるのか理由すらもわからんというのは言い訳にならんのではないかと、私は思うわけでありまして。

明らかに、抗生物質ができたあのときの勢いというのは、今の医学界にないのではないかと。細かい技術は発達してますが、あつと驚く画期的な技術の展開というのはみられない。それは、例えば戦後のテレビ・掃除機・洗濯機・冷蔵庫——こういった家庭電器製品についても言えることでもありますし、あるいはナイロン製品ですね。こういった新しい素材が出てきた。ナイロン製品によつて、家庭の奥様がたが下着の繕いなどする必要がなくなつてしまつた。生活革命が惹き起こされた。みんな、この昭和三〇年代、四〇年代は、技術によつて大きな変換、意識と生活の大きな変化がみられたわけでありまして。

⑤エレクトロニクスと本物志向

それが、いま止まつてしまいました。今はもう、買いたいものがありやしませんです。今は敢えて買いたいものというと、CDとかDATとか、衛星放送付きテレビとか、ワープロとかVTRとかファックスとかパソコンといった、エレクトロニクス関連商品・エレクトロニクス

関連技術しかありません。確かにこれだけは新製品・新技術の名に価している。これは事実です。ではCDを買つたら、もう演奏会場に行かないか？ 昔は、オーディオ製品を買う。うちでカラヤンとかフルトヴェングラーが聞ける。これは嬉しかったわけです。いちいちアメリカとかヨーロッパへ行かなくて済んだんですね。これは嬉しかった。ではいまコンパクトディスクを買つたら、演奏会場へ人は行かないか？ とんでもないことでありまして、サントリーホールなどは、いつも満員です。特に、ちよつといひオーケストラなど来ますと、たちまち前売りの切符はなくなつてしまふ。なんで金使つて時間使つて、エネルギーも使つて、演奏会場へ人は足を運ぶのか？ うちでコンパクトディスクが聞けるじゃないか？ というふう質問すれば、その人は答えるに違いない。「いやあ、コンパクトディスクをいくら聞いても、演奏会場の熱気・全体の雰囲気は伝わってきません。隣に人がいる実感もあります。私は、コピーはいやだ。本物がほしい」と言うに違いないわけでありまして。映像も、特に今日は日曜ですね、日曜などは、朝から世界の風物が紹介されてるわけです。では、もう実際にはどこにも旅に行かないか？ とんでもないことでありまして、昨年は七〇〇万近く、今年は八五〇万近く、海外へ出かけて行くだろうといわれて



いるわけでありませぬ。「映像で、シルクロードでも大黄河でも、なんでもちゃんと見られるのに、なんであなたは旅に出るのか？」と質問すれば、その人は答えるに違いない。「いくら映像を見てても、現地の空気の臭いもわからんし、空気の肌ざわりもわからん。酒の味も飯の味もわからん。人情もわからない。私は本物がほしい。コピーより本物がいい」というんで、出かけて行くわけでありませぬ。

#### 4 技術と身体

##### ①目と耳への刺激と身体への刺激

つまり、いま確かに衛星放送付きテレビその他、エレクトロニクス関連技術・関連商品はありますけれども、エレクトロニクスというのは、残念ながら、目と耳しか刺激しない。この二つだけです。鼻口手足は関係ないわけでありませぬ。映像を見ては甘かったとか辛かったとか、暑かったとか寒かったとか、こういう事はないわけでありませぬ。したがって、鼻から下の実感を求めて、いま実際に旅に行ったり演奏会場に足を運んだり、演劇やってみたりあるいはスポーツやってみたりしているわけでありませぬ。エレクトロニクス商品の中でも、ワープロとかパソコンなどは手足が動く……、まあ足までは動かないかも知れませぬが……、手が動くとか、頭が動くわけでありませぬ。これは、それなりに

面白い。しかし、目と耳だけを刺激してじっとしているものは面白くないというのが現在であります。つまり、いま明らかに技術文明が成熟しておりまして、つまりエレクトロニクスの分野、頭のよくなる分野だけは発達している。頭はよくなるが、手足を喜ばせる技術はない。かつては手足を喜ばせる技術はたくさんあったわけでありまして、ビールなんか、あれは冷蔵庫があるからこそおいしいビールが飲めるのでありまして、これがイギリスのパブ、つまり大衆酒場へ行きますと、今でも冷蔵庫で冷やしてないビールが出るわけでありまして、夏でも馬の小便みたいな生ぬるいビールが出たりしますと、「やつぱり冷蔵庫はいいなあ」と思うわけでありませぬ。これは身体全体で楽しむわけでありませぬ。この身体全体を楽しませる技術がいま、ほとんどなくなっちゃった。これが現代でありまして、つまり頭はよくなってるが、手足を楽しませてくれるものが非常に少ない。昔、青白きインテリというのがいた。青白きインテリ、つまり頭はいいが手足はひよろひよろしている人間の事でありませぬ。そういう人たちは、一応格好のいいことは言うんだけど、あんまり、人々はそういう人の言うことを聞かなかったわけでありませぬ。格好はいいけれども、しかし現実性に乏しい。具体性に欠けるといっているのでありまして、あまり言うことを聞か

かった。体がひよろひよろしてますから、あまり行動的でないわけでありませぬ。いま世界中が青白きインテリになりつつあります。日本もアメリカもヨーロッパも、みんな青白きインテリになりつつある。

##### ②アメリカの兵力低下

ですから戦争に勝てないわけでありませぬ。そのはじまりがベトナム戦争でありまして、一九七三年、ベトナム戦争にアメリカは失敗いたしました。なんでもかという、行軍ができないですね。コンピュータは発達していたのですが、行軍ができない。ちよつと歩きますと、バッテリーと倒れる。そうすると発炎筒が焚かれましてヘリコプターが拾いに来るのでありまして、それを見ていたのが、桐島洋子さんという評論家でありまして、「アメリカの男って駄目ね」とおっしゃいました。確かにアメリカの男は長期行軍に耐えられない。気合いが入ってないわけでありませぬ。気がないわけでありませぬ。それは、ソ連もそうでありまして、アフガニスタンの紛争から結局手を引かざるを得ない。つまり大国がいま小国に勝てない時代です。十九世紀以来の発想ですと、大国というのは、経済力・軍事力・技術力があって、必ず小国を、あるいは少数民族を押しつぶしてしまふ、これが現実でありませぬ。したがって植民地支配があちこちに広まったわけでありませぬ。

す。今は大国が、小国、少数民族に勝てない時代です。なんでかというそれは、気力がないからであります。なんで気力がないか？これは日本でもそうでありまして、もう自衛隊も、ちよつと行軍しますとやっぱ倒れるものですから、「最近では、長距離の行軍は止めておきます」なんていつておりますが、行軍もできない軍隊は、軍隊でしょうかしらね。つまり先進諸国は、どこでもいま、発展途上国に勝てないわけです。そこから国際政治学で、戦争の勝ち負けというのは技術力とか経済力だけでは決まらないというのが、最近言われるようになって参りました。つまり、ベトナム戦争で何故アメリカが失敗したかです。北ベトナム・ベトナム側は、民族解放という正義があった。それに対してアメリカ側は、なんのために戦つてゐるのかよくわからん、特に兵士にはよくわからなかったわけです。つまり、その意味では気合いが入ってなかった。

### ③第二次大戦に於ける日米の気迫

その点からしますと、「待てよ。日米の戦争に於てどっちが気合いが入っていただろうか？日本側だろうか、アメリカ側だろうか？」今までは、日本側は技術力と物量によって負けたと説明されていた。これでもってなんともなく責任から解放された面がございまして。ところが、「待てよ。どっちが気合いが入っ

てたのか？アメリカ側の方が気合いが入ってたのではないのか」というのが、最近の国際政治学であります。つまり、真珠湾攻撃を日本側がやった。アメリカ側は怒ったわけですね。こういう、宣戦布告もなしに奇襲攻撃をかけてくるような、アンフェアな黄色い猿どもを世界にのさばらせていたら、みんなが迷惑すると、アメリカ側の方が正義のために戦った。大統領から一兵卒に至るまで喜々としてジープを乗り回した。これが勝つた本当の原因ではないかというの、最近の国際政治学であります。それに対して日本側は、もちろん聖戦を信じて戦つた人たちがいたことは間違いない。その一方で、ペンを鉄砲に持ち替えさせられて、たこ部屋か刑務所へ連れて行かれるような気持ちで戦地へ赴いた学徒兵がいたということも事実でありまして、つまり、日本側の方が気合いが揃ってなかったというわけであります。

## 5 不確実性の時代

### ①思想の喪失

その意味で言えば、今は先進諸国どこでも気合いが入らない。なんでか。どうしてこうなったかという、いま申しました重厚長大型の技術が成熟しまして、未来がはっきり見えなくなってきたわけですね。どこに未来があるのか、それすらわからん。ある人は宇宙時代に未来を

かける。別の人は、いや、もういつペン農業を見直したらどうかと、こういう話をするわけでありまして、全然方向が違つてます。てんでんばらばらでありまして、どっちの方向に未来があるかわからん。

したがって、大きな思想がなくなりました。大きな思想というのは、未来がはっきりしてる場合に、つまり高度成長期に出てくるわけでありまして、今のような技術文明の成熟期、あるいは細かい技術しかない時代には、どっちの方向に未来があるかわからんから、したがって大思想が生まれ得ない。ガルブレイスというアメリカの有名な経済学者がおられます。彼が書いた『不確実性の時代』という本がありました。この本は一時、十年ぐらい前でしようか、爆発的に売れたわけでありまして。売れた割には読んだ人は少なかったようです。あの中に入った人が書いてあるのか。ずいぶん厚い本でありまして、何が書いてあるかというと、アダム・スミスからケインズに至るまで、今まで経済学の背後にははつきりした哲学があった。その哲学が、アメリカがベトナム戦争に失敗した一九七三年から、ふつと消えてしまった。世の中はこんなもんだよという、大づかみしてくれる哲学です。経済学が始まったアダム・スミスから、近代経済学の終わりと言つたらいいのでしようか、ケインズに至るまで、はつきりした哲学が



あった。その哲学が、今ふっと消えてしまった。これが彼の言う「不確実性の時代」ということでありませぬ。

## ② 「ポスト」の時代

現代をどの様に捉えたらいいのかわからん、というのが誰しもの気持ちでありまして、したがって「ポスト」という字がつくわけでありませぬ。「ポスト・モダン」と建築家は言います。今は近代建築の時代ではない。それよりちよつと後にきてる。じゃあその後とはいったい何かという、全体の枠組みみたいなものが見えない。産業社会よりちよつと後にきてるということ。「ポスト・インダストリアル・ソサイエティ」といいます。産業社会後の時代がきている。じゃあその「後」というとどういう時代かといひますと、その姿が見えていない。こういう時代でありまして、思想のない時代を私たちは生きざるを得ない。こういう状況にあるわけでございます。したがって、ここで改めて登場して参ります新しい価値観が、「つなぎ」ということでもあります。コミュニケーションでありまして、お互い前途で、生きる上で、ちよつと不安がある。個人も企業も国も、みんな不安がある。みんな五年先はわからないというのが実情であります。十年先は絶対わからないことではあります。昔の人は十年ひと昔といったわけで、変化のない時代で十年ひと昔といったわけで、

今は十年経ちますと世の中がらつと変わります。

## ③ 不可視の未来

一九七三年、オイルショックがあつて、世界的に景気が後退したとき。昭和四十八年、あのとき日本人の誰が、十年後に日本が経済的に世界でいちばん成功して、欧米諸国との間に摩擦が生じる時代になると考えたでしょうか。日本はオイルのない国で、誰もがもう駄目だと思つたはずであります。私のうちも、昭和四十八年の暮れ、石油屋さんが灯油をひと缶持つてきてまして、「灯油はこれでおしまいです」なんて言われたときは、もうわが家は駄目だと思つたし、もう日本も駄目だと思ひました。まさか十年後にこんな繁盛するなんて、夢にも思ひなかつた。十年先は絶対わからないということではあります。

さらにその十年前の、一九六四年には、東海道新幹線が初めて走つてゐる。あのとき未来はバラ色に輝いていたはずでせぬ。日本もそうですし、日本の先生筋にあつたアメリカはもちろん無限の可能性に満ちてゐると、誰もが思つていたはずでせぬ。まさか十年後に、オイルショックによつて、自分の先生筋に当たつていたアメリカから先にこけるなんて事を、誰が考えたでしょうか。

十年先は絶対わからないです。その意味では、

一九九八年に、あるいは九九年に、いったい日本がどうなつてゐるか、世界がどうなつてゐるか、そんなことは絶対わかりませぬ。つまり二〇〇年、三〇年先のことは、塾長さんは私に先ほど話をして下さいましたが、ほんとうは十年先は絶対わからないというのが、正しいところでありませぬ。したがひまして、いま二〇〇三年先の話をするというのは、ある意味では遊びであります。ある意味では警告であります。しかし現実かどうかはわからんわけでございます。いま、したがひまして二十一世紀まで、十年ひと昔としますと、ひと昔が一つは必ずあるわけでありませぬ。もし五年ひと昔としますと、ひと昔が二つあるということになるわけでありまして、そうしないと二十一世紀は来ないわけでございます。

## 6 コミュニケーションの再評価

### ① 西部劇から「with you」へ

九〇年代は、その意味で大きな国際経済・国際政治・国内の価値観……いろんな点で、機軸の変動があるだろうということは、当然考えられる。つまり、誰もが生きる上で不安を持つており、死にもぐるいになり、その中でいろいろな新しいことが起こつてくるということではあります。その一つがひま申しました「つなぎ」ということでありまして、お互いにコミュニ

ケーションを大事にする。自分一人では生きて行かない。かつてのジョン・ウエインを先頭にした騎兵隊が西へ西へ行くなんでいう、ああいう格好のいいことはやってられないわけでありまして、——あれは要するに自分たちの生き方を「これは正しい」と、要するに正義の味方です——、これが西部劇の騎兵隊でありまして、西へ西へ進んで行く。出て来るインディアンは雑草かビールスみたいなもんでありまして、これをまた。パタ。パタ。パタ。パタ。またまた弾がよく当たるわけです、西部劇ですしね（会場笑）。向こうの方はあまり当たらない。まあこういう非常に気分のいい西部劇はもうやってられないわけでありまして。最近ではアメリカ人も西部劇でも、気力が衰えたもんですから、「インディアンにも立場・言い分がある。向こうは向こうでちゃんと生活がある」なんて事を言い出したものですから、全然今は西部劇が面白くないです。まあともかくも、古典的な西部劇の時代が終ってしまったということになるわけでありまして。したがって、お互い取柄を交換し合って、手と手を取り合って生きて行くということを得ない。

です。ピレネーの向こうはもうヨーロッパではないというのが、今までの気持ちであったわけですが、そういった国々をも入れていく。ギリシャもそうでありまして、ギリシャというのはヨーロッパでない。じゃあギリシャはアジアか？ いやアジアでもない。じゃあギリシャは何だ？ ギリシャはギリシャだと、こう言ってきたわけですが、そのギリシャも取り込んで、いまはECの中に入れていくわけでありまして。つまり、いろいろと違いはあるけど少なくとも共通点を見いだしていこうじゃないかと、お互いにそれで共通点を見いだしてお互い手と手を取り合おうじゃないか、というのが、今の行き方でありまして、そうせざるを得ない。お互い未来がはっきり見えないんですから、お互い手と手を取り合わざるを得ない。誰もが生きる上で自信を失ったという事でございます。したがってコミュニケーションが、大事になって参りました。

まあこれが現代の精神であります。伊豆の、J Rの伊東という駅を降りますと、その前に広場があります。広場の向こうにバー街がありまして、「With You」と名前のバーが一軒ございまして、英語で書いてあるのであります。そのWとYというのが頭文字ですが、WとYの頭文字を除きまして、他の小文字をみんな赤で書いてある。赤で書いてあるとだけ読みますと、「Ithou 伊東」と読める。また、憎いんでございまして（会場笑）。まあこれが、実は、現代の精神でございまして。私は車で通りがかりに見ただけでございまして、中に入ったわけじゃありませんから、中身については責任をもちかねませんが。

まあともかくも、これが現代の精神なのであります。あなたと一緒に生きて行きますように。自分一人で生きるのが心細いから。これが現代でありまして、したがって、国際化というのは必ずであります。つまり、人と人との交流、人・モノ・情報をお互いに交流し合って生きていく。これは避けられない。日本だけでやっていくという事はできない。これがこれからの生き方であります。

尊皇攘夷というのは、これは幕末にあっただけではない。今でもあるわけでありまして、したがって、外国人労働者は、これは絶対入れないというのが、だいたい産業界です。お役所も

それに同調しまして、一致した意見であります。「ああいった連中が入ってきますと、犯罪は増える、日本人に対する摩擦も増える、同時に安い労賃で働くから、土木工事・建設工事その他、賃金体系を乱す」ということでありまして、もう一斉に反対しているわけでありまして。

## ② 宗教界と技術

しかし、カトリック教会がかつて、何故大きな力を振るいえたかと申しますと、皆様がたお飲みになったかどうか知りませんが、十一月十七日、ボジョレーヌーヴォーの解禁日でしたが、ああいったワイン作りの技術・葡萄作りの技術、それを十八世紀までいちばん先端で技術をもっていたのは、実はカトリック教会であります。あるいはクッキーづくりの技術、おいしいパンを作る技術、その前の小麦をたわわに実らせる技術は、修道院がもっていたわけでありまして。であるから、周辺農民は、修道院の土地へ行つてタダ働きして、そうしておいしいパンを頂く。同時に先端の技術を覚えさせてもらう。したがって喜んで教会に来たわけで、それでカトリック教会の権威が生まれたわけです。技術上の権威があったわけでありまして。まあ、そういってはいまことに失礼ながら、いまカトリック教会がそれほどの力を振るっていないとすれば、まさにそういった先端技術を教えていないからでありまして、教会へ日曜ミサに行けば財

テクの技術が教われるとか(会場笑)、あるいは健康について色々なアドバイスがあるとか、バイオの話があるとか、まあ何かそういうことがあれば、頭がよくなるなら、どんどん来ますよね。まあそう言つてはまことに失礼ながら、今は、聖書に基づいてお説教している……だけといつては怒られるかも知れませんが、まあその気味があるのではないでしようか。もつと、生きる知恵を教えてくれれば、もつと人は行くはずであります。

これは日本の仏教界でもそうでありまして、江戸時代は、まさにお寺さんへ行くと、字を習えた。「子、のたまわく……」といわれたわけです。熊さん八つあんに至るまで、頭がよくなったわけでありまして、これが「寺子屋」であります。日本全国で一万五千も寺子屋ができました。お寺さんがやってくれたわけでありまして。今はやらないから和敬塾ができると、こういう事でございますね(会場笑)。要するに昔は宗教界が、まさにそういった知恵を教えてくれたわけでありまして。今でももちろん一部は、それはカトリックであれ、お坊さんであれ、優れた人がいることは事実ですが、宗教界全体がそういった人生の知恵、あるいは技術、こういったものを教えてくれるのであれば……。今はまさに「宗教の時代」と言われるものがほんとうに来つつあるわけで、もうちよつと努力をしてい

いのではないかと、実は私は思っているわけです。

## ③ 宗教の時代

宗教という言葉は横文字で religion と申しますが、religion という言葉は、regere というラテン語、レレグレというラテン語からきていると言われております。regere というラテン語は、結び合わせるという意味です。レレグレというラテン語は、バラバラになったものを再び集めるという意味でありまして、誰もがいま、集まりたがる。友達になりたいわけがあります。一人でいるのが寂しい。まさに宗教の時代が来つつありますね。Going my way で、独立歩の精神で未来に向けて突進して行けるのは、今は発展途上国がそうですが、先進国は今はどうできなくなつてしまいました。お互い手と手を個人的に結び合う。国と国とも結び合う。こういった時代であります。誰もが友達になりたい。したがって、まさに今は宗教の時代が来つつあるということが言える。

## 7 真の国際化

### ① アジア人入国と日本の排他性

今はアジア地域の人たちがやはりそのようなでありまして、技術がほしい。なにもエレクトロニクスの先端技術がほしいのではなくて、定規に鉛筆当ててすつと引くような、そういった



技術がほしいわけでありませぬ。いくらハイテクの製品を本国へ持ち帰ってみても、それを入れるコンセントがないわけでありまして、まさにコンセントを整備する技術がほしいわけでありませぬ。したがって、外国人の人たちが日本に来る。単純労働と言われてるものでも、道路工事一つとつたつて、今はスコップで穴掘る技術なんてありません。みんな機械を使うわけです。道路工事であれ、建設工事であれ、あるいはトンガリ帽子かぶってマクドナルドハンバーガーを売るんであれ、みんなこれノウハウ・技術があるわけでありまして、つまり、日本に来て技術を覚え、お金を貯め、本国へ帰る。今は日本の一年間の収入を一としますと、バングラデシュは〇・〇一しかありません。パキスタンは〇・〇三です。フィリピンは〇・〇五です。したがって日本に来て働いて、お金を儲けて技術も習得して本国に帰りたい。誰もがそう思っているわけでありませぬ。

それを日本人は許さない。日本のためにならんと思ってる。つまり、自分の国のことしか考へてないのでありまして、アジア諸地域の中に自分を広げるといふ態度がないわけでありませぬ。このように空間感覚を広げませんと、これからは日本は生きていかれませぬ。いま申しましたように、ヨーロッパでもアメリカでも、空間感覚を拡大して、大きなヨーロッパ・大きな

北アメリカを認めて、その中で生き合おうとしているわけです。もちろん、他の国と共存するのですから、面白くないこともたくさんあります。しかし、にもかかわらずそれを忍んで共存共栄しなければ、今はみんな生きていかれない。ということは、重厚長大の技術が成熟しているときで、次の重厚長大の技術が出て来るか、それはよくわかりませんが、少なくとも五年や十年は出ない。さつき申しましたように十年以上先はわからないから、まあこれは言い難いことですが、まあ最低二、三十年はかかるのではないかと、なんとなく私は感じているわけでありませぬ。その間は空間感覚を拡大せざるを得ない。つまり、人・モノ・情報の交流・国際化は必至なものでありまして、お互い助け合つて生きて行く。自分たちだけが生きればよいのではなくて、アジア諸地域全体が繁栄して、あるいは文明の程度が上がると、その中に日本も生かされて頂くといふ道をとらなかつたら、最後は日本は、まあ自滅するだろうと私は思っているわけでありませぬ。かつての古代ローマと同じであります。点と線の関係しかできないのだけでも、いかにその線を太くしていくかということが、これからの大きな課題でございます。というわけでありまして、一つは国際化ということとは日本で良く使われるのですが、国際化してないからそれは使うのでありまして、手を

縛つておいて、どうやって手を解いたらいいかと一生懸命いろいろと議論しますが、縛つておいたのではしかたがないわけでありませぬ。

関釜フェリーはいま一日一便通つておりますが、日本国内に韓国ナンバーの車は一台も走つていません。ああいう外国の車が日本に入るなんてことは、有り得ないと思つて居るわけでありませぬ。日本の車はどうなんでしょうか。韓国の中に入つて居るのでしょうか。入つてないのでしょうか。それについての関心は、ほとんどなたもありません。相互主義ですから、韓国から日本に車がフェリーボートを通つて入つて来れないならば、日本の車も韓国に入れない。これが常識であります。しかし、実際は、日本の車は韓国の中を走れるわけでありませぬ。もちろん韓国側は、日本が国内への車乗入れを認めませぬから、対抗上韓国のほうも、車がバラバラになるぐらい調べるといふことをしているようですが、しかしともかく走れるわけでありまして、これはまさに不平等が実際行われているわけでありませぬ。なんで日本に入れないかといひますと、「いやあ、自賠償の問題がございまして、日本で事故を起こしますと加害者側も被害者側も共に迷惑しますから」という理由になつて居るわけですが、そういう理由になつて居ることも、ほとんど誰も知つていないという状況でございます。関釜フェリーは一日

一便通っていますが、その時間も誰も知らないというのが現実であります。韓国の若者は、毎日毎日閔釜フェリーで日本に入ってきているわけですが、ほとんど誰もそういった事実注目しない。ご当地・下関の人も、若い人たち自身があまりそれを好んでいないのが現実であります。というわけでありまして、したがって韓国語の案内も、船着場にはちよつと書いてありますが、あとはほとんど下関にない。実に冷たい状況が、いま日本にございます。ほとんど誰も関心をもたないわけでありまして。

## ② 普段着の国際化

パリの街頭に立つてみますと、もちろんフランスナンバーの車が走っているが、同時にドイツナンバー、イギリスナンバー、オランダ、ベルギーナンバー、あるいはスペイン、ポルトガルナンバー、イタリヤナンバー……いろんなナンバーの車が走っています。これが国際化ということですよ。普段着の交流ということですよ。もちろんいい人も乗っています。学者とか文化人とかですね。学者や文化人がいいとは思いませんが、ともかくも、スポーツマンであれ、芸術家であれ経済人であれ、もちろんそういういい人も乗っている。しかし同時にスリ・泥棒・ギャング・ジプシーも乗っているのが、車の交流でありまして、こういった普段着の交流が、実は国際化ということですよ。いい人ばかり交

流するのではなくて、普通の人の、普通以下の人みんなこれがお互い交流し合う。

我々は、韓国から車が入って来ると、ピストルとか麻薬とか、なんか悪いものが入って来るとばっかり思い込んでますよ。韓国の方が実は恐れているわけですよ。日本のヤクザというのは世界的に有名でありまして、ヤクザがどんどん韓国に行くわけです。この方が彼らははるかに迷惑しているということとはほとんど意識しないわけですよ。向こうからいろいろ悪いものが入って来ることしか考えていないのが日本ですから、したがって国際化の感覚がほとんどないと言っているのではないかと。NHKのキャスターであった木村太郎さんがおっしゃっていましたが、「国際ニュースっていうのは評判がいいようであって格好はいいのですが、しかし誰も見てない。国内ニュースですと、人を殺したとか脱線事故があったとか、これはよく見られるけど、国際ニュースは評判がよくない」と、彼は言っていました。まさにそれは現実だろうと思うわけでございます。

## 8 これから求められること

### ① 友達をつくる

ということでありまして、日本だけでやって行きたいという気持ちは非常に強いけども、しかしながらそれでは九〇年代は乗り切れない

だろう。多かれ少なかれ、人・モノ・情報をいかに交流していくか、お互いどうやって心を開いていくかが、これからの大きな課題になるだろう。情報の交流といいますと、なんか衛星放送なんかでお互い交流することばかり考えますが、これなどはほんとうに力のない上澄みであります。人と人とが出会わないことにはお互いに友達にもなれんし知恵もつかない。だからこそ国際会議が行われているわけでありまして。国際見本市であれなんであれ、なんで今の衛星通信の時代にお互いに人と人が出会うのか。金もかかるし時間もかかるしエネルギーもかかります。しかもお互いに出会って、目から鱗の落ちる経験なんてのは百回に一回ぐらいいかない。国内の集まりでも目から鱗の落ちることなんてのは百回に一回でありまして、残りの九十九回は時間の無駄・エネルギーの無駄・金の無駄でございます。「ああ、つまんなかったなあ」と、これがまあ実感でございます。まあ今日はその百回に一回と思えますが（会場笑）。まあともかくも、大体そんなものであって、無駄が多い。にもかかわらず出会わないことにはお互い友達になれない。友達になれないことには知恵がつかない。皆さんがたもこれからいろいろと世界的に活躍されるでしょうが、これからあんな分野であれ、ビジネスマンであれ学者であれなんであれ、これ

から内外に豊かな人脈がある、同業種・異業種の間にかくさん友達がいる。これこそがこれから道を開いていく、それこそ道なんでありまして、一人でシンネリムツツリでもって考えて道が開ける時代じゃありません。シンネリムツツリで考えて道が開けたのはまさに高度成長期の話でありまして、今のような時代にはたくさん友達をつくるのが大事なことです。

そうすると、お互い会議で集まって来る。まあ、昼間の話はつまなくても、「つまらないから、これだけじゃ気持ち治まらないから、今晚いっぱいやりましょうか」という話になりました、「今日は講師は馬鹿な話をしましたね!」という話になりますよね。そうすると、それをきっかけにお互い飲んだり食ったりすると、友達になれる。友達になれると、相手は何気なく自分の仕事の体験など話す。聞いている方があつと驚くことがある。「はあつ! あなたの国ではそんなことをしてるんですか」「おたくの業界ではそういう発想があるんですか」ということでありまして、自分の仕事に大いにプラスになる。これは出合いの妙というものでありまして、出会わなければ出てこないことです。テレビ会議をいくらやったって、ブラウン管の向こうとは握手できないんですから、友達になれないですね。あるいは会議に出席もせず

議事録なんか見ても、一ページ目から最終ページまで読んでみても、そこから友達はできませんから、したがって知恵はつかない。誰もがいま友達がほしい。あるいはお互いに友達になるような、そういった能力というのは非常に大事なことであります。

## ② 飲み合い、食べ合う関係

一緒に食ったり飲んだりする。当和敬塾のようには、食べたり飲んだりするのは非常に大事なことであります。修道院でもいちばん大事な場所は「レフエクトリー」といわれている食堂であります。食堂に人が集まって参ります。元々職業が違う。出身地も違う。あるいは年齢も違う。時には食事をするとときに沈黙を命じられていられることもある。しかしそれでもお互い食べ合う、あるいは飲み合いますと、そこで心が開ける。開けるとお互い友達になれる。したがってお互い兄弟であるという実感が湧いて参ります。これがいちばん大事なことであります。いまキリスト教がかつてほどの力がないとすれば、さっきの先端技術の他にも原因があるのでして、日曜ミサの時に、パンも配らんしワインも飲み合わない。かつては、ワインをお互い飲み合う。一つのパンを分かち合って食べる。今のように神父さんがやっているお煎餅をペッペッペッペッと口の中に入れるのじゃなくて(会場笑)、お互いパンを分かち合う。そ

のとき友達になれるわけでございます。私はクリスチャンじゃありませんが、聖書に「コリント人に与える第一の書」というのがありまして、これを見ますと「パンは一つであるから、私たちは多くいても一つなのである」と書いてある。パンは一つなのだから、それを分かちあつて食べる時、たくさんいてもみんな一つになれるのだと書いてあるわけでありまして。これこそが実は宗教の本義でありまして、日曜ミサのときにパンを分かち合って食べる。ワインを飲み合う。それをもつて初めて兄弟になれるのでして、やらないもんだから、だんだん教会にお参りする人がヨーロッパでもいま減っています。ということでありまして、私は宗教家でもなんでもないが、まさにその宗教の本義というのがいけばん大事なときなので、それは実際イベントなら行われています。一緒に大きな鍋で芋を煮たり、あるいは蠣鍋つくったりしてみんなで食べ合う。「二つ釜の飯を食う」という言い方がありますが、これこそお互いの結び合いの原点であります。それぞれ家庭ではいま「孤食」ということが言われていますが、孤食などということを大きな声で言うことにはないのであります。週に一回、時には月に一回、年に何回かでもいい、そういう家の祭りをやって、一緒に食べ合う、あるいは作り合つて食べ合う。これこそがいま、お互いの結び合いの出発点であるはず



ずでございます。最近のフランス語では、「コンヴィヴィアリデ」という言葉が、いま大いに流行っています。コンヴィヴィアリデという言葉は新語であって、字引にも載っていない言葉です。コンヴィーヴというのは共に食事をし合う仲間のことです。食事をし合う仲間のような親しみ相和して生きる人間関係、これがコンヴィヴィアリデでありまして、これが今、最近は歴史学の方でも大いに用いられている言葉であります。誰もがお互い、集い楽しみつつ知恵を出すということを真剣に求めているわけであります。

### ③ 全身で思考する

と同時に、ただエヘアエラ笑っていても駄目なのでありまして、もちろんそれもいいのだけれども、一人一人が全身で考えるということも、その一方で大事なことであります。本を読んでいるだけではそれこそ目しか使っていないわけでありまして、目しか使わないような学習方法というのは、要するにいい考えを生まないんですね。いい考えというのは、全身で考えたときにいい考えが出て来る。目も鼻も口も手足も全部を動かしたときに、いい考えが出て来るわけであります。インテリジェントビルの中をエレベーターで上がり下がりしたただけでは絶対に馬鹿になります。要するにこれは目しか動いてないから。上がり下がりすれば多少は動

いているかも知れませんが、ほとんど動いてないのでありまして、これは馬鹿になるわけでありまして。そこから出て、例えばいろいろシンポジウムに出るとか、旅に出る。デカルトという人が十七世紀におりましたね。この人は青年時代の半分を読書に使った。あと半分は「世間という大きな書物を見るために旅に出た」と書いています。全身が動いています。旅に出るときは。団体旅行じゃ駄目です。一人旅がいちばん勧められる。まあ女性の場合には一人旅もなかなか難しいというのがあるかも知れませんが。でも一人旅をしますと、いづどこからの様な危害が加えられるかわかりませんから、目も耳も鼻も口も、非常に先鋭に動いています。

藤原義江さんというオペラ歌手が初めてイタリアへ行った。駅を降りた。その時、駅のアナウンスの声の素晴らしさに彼は参ったと思っただけですね。まさに歌うような調子で、朗々とアナウンスする。まあこれはヨーロッパの駅どこでもそうで、これは発声訓練をしているからです。小学校の時から発声訓練をずっと学校でやってくれます。日本は発声訓練というのはないわけですから、私などは、こうした無様な発声を致しております。イタリアでは、これがコミュニケーションの基本ですから発声訓練をちゃんとやってくれます。これも、「参った！」と彼は思ったわけですが、これも、

一方において発声訓練をしているといった向こう方の事情もありますが、こちら側の事情としては、緊張しているから耳がよく聞こえる。まあ、藤原義江さんは専門家だから元々よく耳が聞こえたってことはあるでしょうが。また耳も目も鼻も口も手足も、そういった五感が特別磨かれるのが、旅であります。旅であれ登山であれ、まあなんでもいいんですが、全身の感覚を鍛えるということが実はいちばん大事なことであります。

ヘンリー・フォードという人は、どうして今の *assembly line* (流れ作業による自動車組立) を発明したかといいますが、彼はある日屠殺場にいた。決して自動車組立ばかりやっていたんじゃない、屠殺場にいた。牛が駆り出されるのをじいっと見てた。そうしますと一頭の牛が駆り出されてベルトに載って、だんだんちっちゃくなっていく。だんだん小さくなって最後は肉片になるわけです。ベルトに載ってずうっと流れ作業で捌いていく。それをじいっと見てて、「あつ！ このベルトを逆に回したらどうだ」。逆に回しますと、ちっちゃな肉片がだんだん大きくなって、最後は一頭の牛になるんでね、これが、ベルトコンベアーによる組立を彼が思い付いた動機であります。つまり、そういった別の場合で彼なりに他の器官を働かせていたからこそ出て来ることでありまして、自分なり

に足を使う、手を使う、手足・鼻を鍛える。これからは、こういったことをやっていくことがいちばん大事で、全身で考えてこそ大きな発想が出て来る。

## 9 まとめ——知的野蠻人のすすめ

つまり、これから生きていく上には、一つは友達になることが大事なのですが、もう一つでは自分で、如何なる状況の中でも生きられる。コンピュータもジェット機も扱えるが、しかし何がなくても生きて行かれる。こういった知的な野蠻人といえますか、まあこれがこれからの生き方ではないかと思うわけでありませう。電気がなくなつたときに、水がなくなつたときに、どうやって水を得るか、例えばそういったような知恵ですね。あるいはひどい下痢をしているような時にどうやってたらその下痢が止まるか。まあこういったときにお婆ちゃんの知恵なんかは非常に大事なのでありまして、終戦直後満州を逃げ感っていた人が、下痢をして死にそうになつた。その時、はつと、お婆ちゃんに言われたことを思い出したんですね。「そういう時は炭の粉を飲んだらいいよ」。ということ満州人のうちへ行つて燃えさしの薪をもらつて、その焦げたところを削つて飲んで、命が助かつたという話がございませう。だいたい昔の人はそういう知恵をもつていたわけでありませう。

て、技術文明が発達すればするだけ、そういう知恵を我々は失っているわけでありませう。今だつてもちろん炭の粉飲むのもいいですしね、あるいは酒好きだつたらウイスキー飲むのもいい。強いウイスキーとかブランドーを飲みますと、やつぱりアルコールが水を吸収して下痢が止まるわけでありませう。

こういつた、何がなくとも生きていかれる、しかしジェット機もコンピュータも扱える、これが知的野蠻人でありまして、知的野蠻人になることが、これから実は大きな発想をする場合にも必要であります。極地でも住める、北極南極でも住める、何がなくとも住める。しかし同時にジェット機もコンピュータも扱えると。こういった人間が、実はこれからの国際社会、価値観が大きく変動していく社会の中に於ける人材・人間、積極的にたくましく生きられる人間というものではないか。同時に人と人との結び合いというものに対してセンスをもっている人たちですね、まあこれが、これからの国際化の時代の人たちではないかと思うわけでありませう。皆様がたはこの和敬塾に於きまして、お互いに共同生活の良さを十二分に味わつたに違いないと思ひます。これからこれを、大きな貴重な体験といたしまして、国際社会の中で、世界の中でさらにその感覚を活かしていく。と同時に、自分なりに古い知識を捨てて新しい知

恵というものを培つていく。こういった能力をこれから益々大きく磨いていかれることを念願する次第でございませう。日本も、世界も、そういう意味でいま大きな変わり目にきており、自分なりに新しい価値観を作つていく主体となつていただきたい。こういうふうに思うわけでございます。(拍手)

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。